

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究（小・中学校）」  
 平成25年度委託事業完了報告書  
 【推進校】

都道府県名	山口	番号	8
-------	----	----	---

推進校名	山口県宇部市立神原中学校
------	--------------

1. 重点課題

学ぶ意義や目的をはっきりさせるためにキャリア教育を充実するとともに、確かな学力と人と関わる力を培うために「指導方法の工夫改善」「研修体制の充実」「学習環境の整備」「生活・学習習慣の定着」という4つの方向性を総合的に捉えて実践する。そして、それらをうまく機能させるために「校区内小学校との連携」・「家庭・地域との協働」を基盤とする。

取組の方向性としては、まず、小・中学校が「学び合いのある授業づくり」を共通テーマに掲げて合同で授業研究に取り組むとともに9年間を見通した一貫性のある指導について検討する。さらに、小中共同で全国学力・学習状況調査をはじめ各資料等の分析を行い、すべての教育活動を学力向上の観点から見直し、小・中学校で一貫・連携して取り組む項目及び各校種ごとに取り組む項目を整理して実践・検証を行う。

2. 重点課題への取組状況

小中共同で全国学力・学習状況調査をはじめ各資料等の分析を行い、すべての教育活動や児童生徒の実態を学力向上の観点から見直し、小・中学校で一貫・連携して取り組む課題及び各校種ごとの課題を整理し、関連する様々な面から確かな学力の育成に向けた取組を実践・検証した。

(1) 全国学力・学習状況調査の「小中追跡」分析

現在の中学3年生について、今回の調査と3年前の調査（小学6年生のとき）を関連させて分析し、小中連携の視点で傾向や課題を探った。

① 学力について

偏差値に換算して小6から中3にかけての変化を分析した。特に算数・数学について、成績がかなり変化している生徒があるものの、概して小学校算数の状況が中学校数学の状況に移行している傾向がみられた。

<算数・数学Bの変化（数値は人数）>

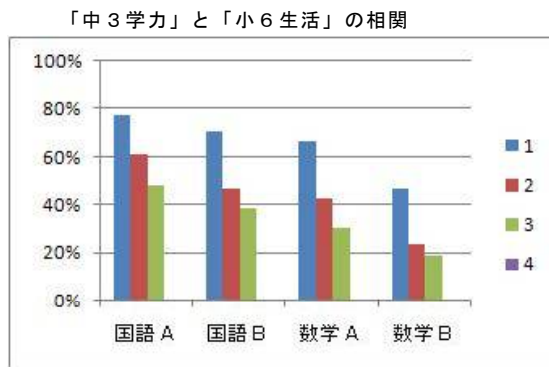
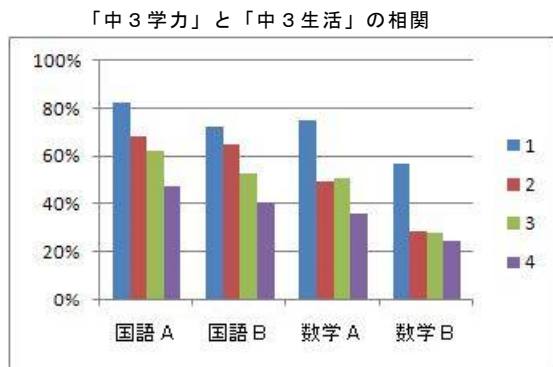
算数・数学B 小6偏差値	算数・数学B															
	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75		
中3偏差値																
10																
15																
20																
25																
30																
35																
40																
45																
50																
55																
60																
65																
70																
75																

② 学力と生活との相関関係

中3における学力と生活の関係とともに、中3の学力と小6時代の生活との関係も分析した。その結果、下記（宿題の例）のように、中3の学力が、小学校時代から積み重ねられた生活状況と相関が強いものは、次の5項目であった。

- ◇朝食を毎日食べる。
- ◇家で宿題をしている。
- ◇家で授業の復習をしている。
- ◇学校の規則を守っている。
- ◇読書が好きである。

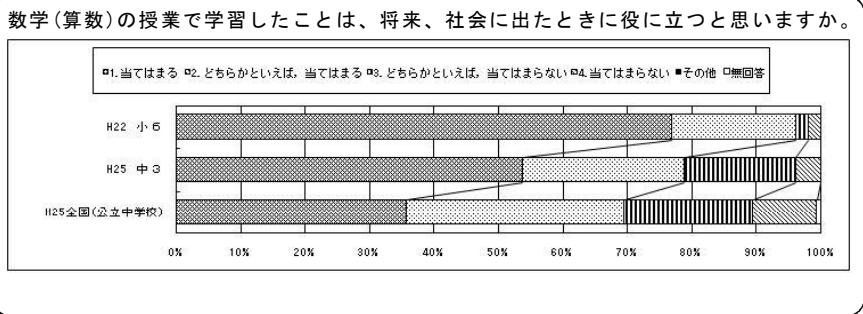
家で、学校の宿題をしていますか



○ % : 学力調査の正答率  
 ○ 1 : している 2 : どちらかといえばしている 3 : あまりしていない 4 : 全くしていない

③ 生活状況について

小6時代と中3現在を比較した。「人の気持ちが分かる人間になりたい」などの項目では小から中にかけて向上し、心の成長が伺えた。その反面で、「将来の目標や夢」、「学習内容の有用感」などについては肯定意見が大きく減少していることがわかった。(全国においてもこうした傾向がある。)



④ 課題や今後の研究取組の方向性について (分析結果より)

- ・特に算数数学については、小中の学力の積み重ねが大切である。
- ・小学校時代からの生活習慣の積み重ねが、中学校での学力に大きく影響するものとして、「朝食摂取」、「家庭学習(特に宿題と復習)」、「読書の習慣」、「規範意識」があげられ、小中9年間を通じて、重点的に指導していくことが大切と考えられる。
- ・中学校において、将来の目標や夢、学習内容の有用感などをもたせるため、キャリア教育の強化や、学習内容と生活を関連づけるなど興味や関心を高める授業の工夫が望まれる。

(2) 小・中学校で一貫・連携した取組(「小中連携3本柱」)

9年間を通じた一貫性のある取組として、次の「3本柱」に整理して実践することとした。

① あいさつ・言葉遣い

充実した授業の下支えとなるのが学習規律、学習環境であり、その基盤は「あいさつ・言葉遣い」であろう。元気のよい明るいあいさつ、時と場をわきまえた適切な言葉遣いは、単なる儀礼的なものでなく、授業での発表や話し合い、聴き合いをスムーズにするとともに、日々のコミュニケーションづくりにもつながる。また、学級等に許容的雰囲気をつくり出し、互いが楽しく学ぶ環境づくりにも資するものである。小学校低学年からのこうした習慣づくりを大切に継続いくこととした。



◇小学校……「言葉のアンケート」から自分の発言を振り返ることで、児童の「気持ちを伝え合う言葉を大切にしようとする態度」の育成を図った。

◇中学校……生活面としての向上のみならず、国語や英語など教科指導を通して、豊かな表現力をもつ日本語の素晴らしさに気づき、よりより日本語の使い手となる言語能力の育成を図った。

②「学び合いのある授業づくり」の共通実践(小中合同授業研究)

学力向上の取組の中心は当然「授業」になる。宇部市では、以前から、学校を共生・協同の場として位置づけ、子ども同士、子どもと教師、教師相互、そして保護者や地域も含めた豊かな人間関係の中で人格形成と学力向上をめざす「学び合いのある学校づくり」を推進している。こうした経緯を踏まえ、「学び合いのある授業づくり」を小中共通の授業研究テーマとして掲げ、子ども主体の授業を創造し、学ぶ意欲を引き出しながら確かな学力を育む共通実践に取り組んだ。

ア 小中教員の合同授業研究

「聴き合う関係の中で、互いを認め合いながら、学びを深める授業」を目指し、年間を通じた授業研究を小中で相互に行った。また小中合同の研修会を開き、授業をもとにした研究協議を積み重ねた。



イ 小中教員の相互乗り入れ授業

中学校全教員が小学校への乗り入れ授業を行った。(年間30時間) また、小学校教員が中学校教員とチームティーチングで中学校の授業に参加した。

ウ 基礎学力向上に向けた調査

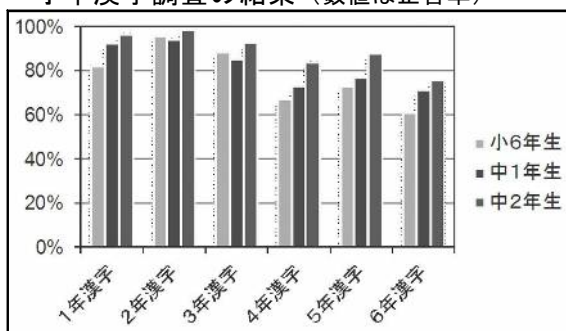
小6の学力が特に算数においては3年後も影響する傾向にあることから、基礎計算力の定着状況を調べ、小中ともに指導に生かした。また、漢字について同様に行った。

### 基礎計算調査の結果（数値は誤答率）

	中学2年	中学1年	小学6年
3. 5+6	13%	14%	14%
1. 1×6. 5	22%	12%	14%
2-0. 4×(6-2)	15%	25%	14%
5÷4	15%	19%	14%
37. 5÷4. 6 (商は整数、余り出し)	61%	78%	61%
7+8×2	10%	14%	28%
4/7-3/8	21%	22%	23%
2と1/4+1と1/3	27%	12%	47%

小数の計算、帯分数の計算、通分に小中共通の課題があることがわかる。その他誤答率の低い問題においても、誤答の出現は中学校まで続く傾向にあった。7+8×2のように中学校で文字式を学習することで、小学校で学習した内容の理解が深まると考えられるものもあった。

### 小中漢字調査の結果（数値は正答率）



小1から小6で学習する漢字について、それぞれ正答率を小6、中1、中2ごとに調べた。小6、中1、中2と正答率は増加するが、どの学年で調査しても4、6年の漢字の定着率が低くなっている。3年生以降、正答率が下降することから、定着を図るために反復練習にしっかりと取り組ませた。また、語彙を増やし表現力を伸ばすために読書指導にも力を入れた。

### ③ 学習・生活習慣・生活リズムの向上（早寝・早起き・朝ご飯・メディアコントロール）

小中データ分析から、小中9年間を通じて、「朝食摂取」、「家庭学習（特に宿題と復習）」「読書習慣」、「規範意識」について重点的に指導していくことが重要と考えられることがわかった。

また、携帯電話やスマートフォンに関するアンケート調査を行った結果、情報機器が子どもの生活リズムや学習習慣に多大な影響を与えていることもわかった。こうした生活習慣やリズムについて、小・中学校で連携してPTAの協力も得ながら向上させていくことも学力向上の重要な柱として取り組んだ。

#### ア 学校生活の向上に向けた小中連携指導

授業での約束ごと「小中いっしょに取り組むこと」を作成し、9年間を通して共通実践をスタートさせた。

- ◇授業の決まりを守る。◇人の話を聞く。◇自分の意見や思いを伝え合う。◇グループで意見交換ができる。
- ◇家でも毎日勉強に取り組む。

#### イ メディアコントロールをめざした家庭・地域との連携

情報機器との関わりについて、家庭や地域と連携して以下の取組を行った。

- ◇メディア調査の結果をもとに、PTAと協力した啓発
- ◇連携する小中の保護者や地域の方々を招いたメディア講演会



【小・中いっしょに取り組むこと】

#### ウ 小中合同の学校保健安全委員会

- ◇小中合同で保護者や医療関係者も含めた学校保健安全委員会を開催
- ◇生活リズムの啓発の取組を実施

### (3) 中学校独自の取組

#### ① 言語活動の充実と板書計画を重視した授業づくり

小中で「学び合いのある授業づくり」に取り組む中で、中学校では特に「言語活動の充実」による思考力、判断力、表現力等の育成とともに、「板書計画の重視」による学びの見通しや振り返りを大切にして、学力の一層の定着を図った。

#### <実践例>

- ・英語・・・身近な体験のスピーチ。発音・抑揚はもとより、どう表現すれば気持ちがよく伝わるかを考え、時にはジェスチャーを交えての発表。
- ・数学・・・図形の論証や関数のグラフについて、なぜそうなるのかといった説明やグラフから読み取れることを発表しあったり、事象をグラフ化したりするなどの学習活動を工夫し、頻繁な授業公開を実施。
- ・国語・・・読んだ文章をもとに、自分の知識や経験に照らし合わせて自分の意見を加えて表現。



- ・音楽…思い描いたイメージをリコーダーを用いて曲のリズムや強弱などで表現し合う活動。
- ・全教科…小学校の授業での板書の綿密さを中学校に生かす。  
 ( ・板書型指導案を活用し、最後まで授業を見通して、要点や流れを板書に残す。 )  
 ( ・授業の最後に板書を見て今日の学習を振り返る時間の設定。 )



【発表の場の工夫】



【授業公開の日常化】



【板書の工夫】

## ② 教科指導の中でのキャリア教育

生徒質問紙の「授業での学習は将来役に立つと思いますか」などの質問に対する肯定的な回答が小学校時代よりも減少していることから、教科指導の中でのキャリア教育を意識し、各教科の醍醐味、生活との関連、有用性、応用性などを伝え、興味や関心を高める授業を工夫した。

<実践例>

- ・数学…身近な模型や実物を用いた関数の学習や折り紙を用いた図形の学習などの工夫。
- ・英語…職場体験を通して感じたことや将来の夢を英語にして発表。海外で活躍する企業の方を招き、実際に現地で使用された表現を使ってのスキット作り。
- ・家庭…食生活改善推進員を招いての調理実習や保育園の園児を招いて保育実習など多くの人々に関わりながら学習を深める工夫。
- ・理科…いくつかの抵抗器を組み合わせて目的にかなう回路を考案し、実測して確認する発展課題を工夫した学習。



【課題提示の工夫】



【園児を招いた保育実習】



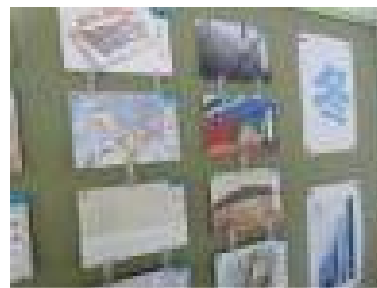
【講師を招いた調理実習】

## ③ 学習環境の整備

作品の鑑賞や学習の足跡が見える展示や掲示の工夫、空き教室の教科教室化に取り組み、環境面の充実を図った。



【作品展示】



【季節を感じる言葉】



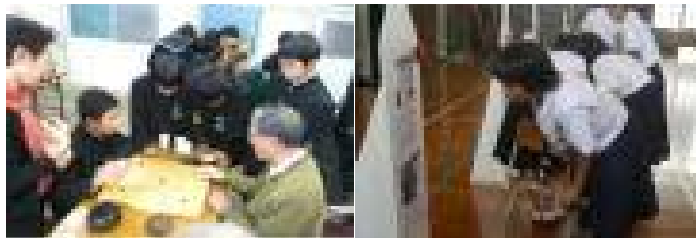
【教科教室】

## ④ 道徳教育の充実

相手の気持ちを察した思いやりの心、助け合う心が「学び合いを取り入れた授業」を支える重要な要素となる。学力の土台は人権、思いやり、規範意識などの心の教育と捉え、道徳教育の充実に努めた。

＜実践例＞

- ・家庭や地域と連携し、「命の大切さを学ぶ教室」講演会の実施。
- ・生徒会による『思いやり』の気持ちを浸透させる「For (Four) You 宣言」の採択。
- ・「囲碁教室」など地域の方と生徒の自由な交流時間の設定。



【囲碁教室】

【命の大切さを学ぶ】

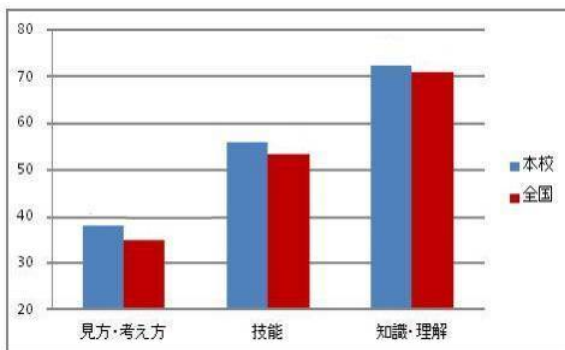
3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査の結果分析 (H22、H25調査)

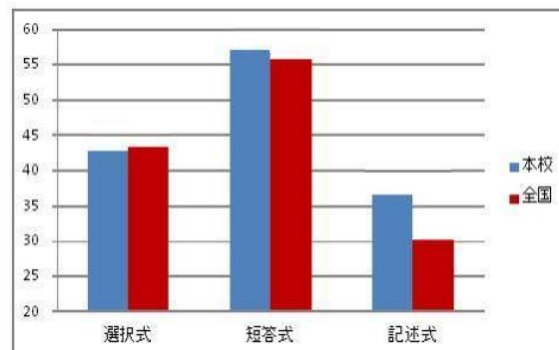
◇全国学力・学習状況調査 (平均偏差値の比較)

	国語 A	国語 B	算数数学 A	算数数学 B
小学 6 年時 → 中学 3 年時	1.7上昇	1.8上昇	3.0上昇	3.9上昇

◇平成25年度全国学力・学習状況調査 ( 数学 B 平均正答率)



【評価の観点】



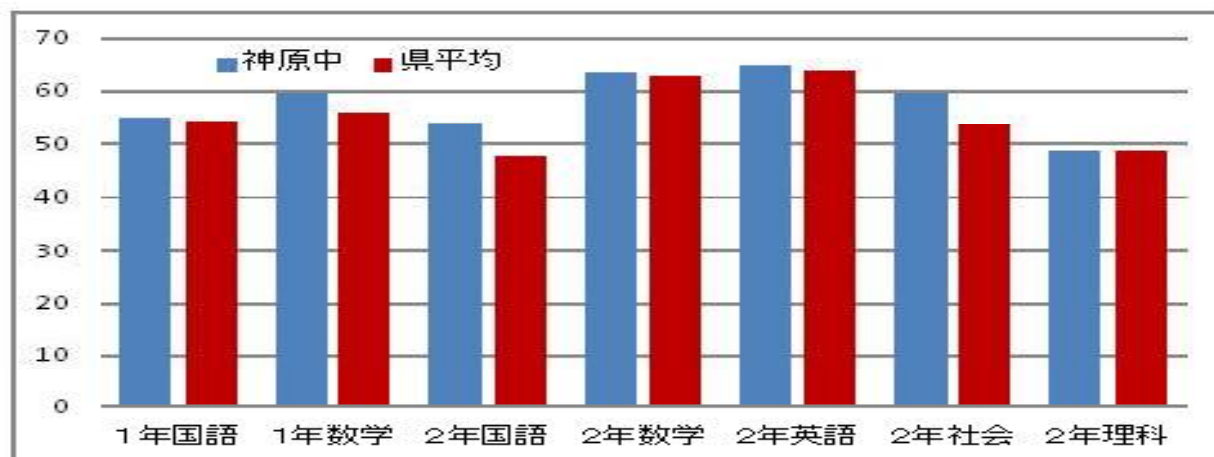
【問題形式】

3年生において、小学6年生時から国語、数学の結果が伸びている。特に数学Bのすべての観点で全国平均を上回り、なかでも記述式問題の正答率が高くなっている。これは学び合いを取り入れることにより、意見のやり取りや議論の機会が増え、考えを文章に整理する力が身につけてきたものと捉えている。

また次のような成果も表れてきた。

- ・以前はすぐにあきらめていた生徒が、応用的な問題にも粘り強く取り組むようになり、積極的に友だちや教師に質問する姿が多く見られるようになった。
- ・学習することの有用性を理解し、意欲的な生徒が増えてきた。

(2) 学力定着状況確認問題 (山口県) の結果分析 (平均正答率) ※平成25年10月実施 (1, 2年)



1・2年生も今までの取組が実り、総合的に力をつけている。ほとんどの教科で県平均を上回っている。

1年生では、国語において特に「書く能力」が正答率が高かった。これは表現力を豊かにする作文の指導や学び合いにより、自分の意見を文章にまとめることを日常的に行ってきた成果と思われる。数学ではどの観点も県平均以上であり、特に記述式の問題で正答率が高いのは国語の「書く能力」の高さとも関連するものと考えている。

2年生では、特に国語と社会が県平均より6ポイント以上高い正答率が出ている。国語では「話す・聞く能力」、社会では「資料活用の技能」と「社会的事象についての知識・理解」が特に高い。これは学び合いで人の話をしっかり聞いたり、自分の知識や資料を上手にまとめ、意見を分かりやすく発表することができるようになったからではないかと思われる。一方で「授業で分からないことがあったらどうすることが多いですか」に55%の生徒が「友だちに尋ねる」と答えており、1年次の25%よりも大きく増えている。逆に「そのままにしておく」と答えている生徒が減少しており、これも学び合いが浸透している成果と捉えている。

### (3) 生徒・教員の変容

#### ① 生徒の意見から

- ・学び合いをすると話す場面が多くなる。今までは比較的黙っていたことが多かった私が、ある時仕方なく意見を述べたところ、みんなにすごく感心されたのでうれしかった。それからは積極的に話せるようになった。
- ・もう少しで解けるとところでチャイムが鳴って残念だったことがあった。授業の終わりが残念という気持ちになることが増えてきた。
- ・料理のプロである外部講師の方に「片付けが上手な人は料理も上手になれる」と励まされてうれしかった。これからも挑戦してみようという気持ちが湧いてくるようになった。
- ・ある実験で、計算上は間違っていないのに、実際は違う表示が出た。なぜなのか原因をみんなで考えあつて突き止めることができた時はとてもうれしかった。みんなで考えることの楽しさが分かってきた。
- ・問題を解くときや質問の意味が分からないとき、友だちに聞いたら分かりやすい説明ですっきり納得することができた。
- ・以前は問題が解けたら分かったつもりでいた。しかし自分が友だちに教える途中で分からなくなることがあり、そこで友だちともう一度考えてみると、自分がよく分かっていないことも分かり、より深く理解できるようになった。

#### ② 教員の意見から

- ・小学校からの追跡調査で苦手な分野の傾向をあらかじめ知ることができたので、的を絞った指導ができた。
- ・以前は主題を教え込むことに熱心になっていたが、小学校での子どもに寄り添った授業の展開を参考に、生徒の視点を中心に考える授業に変わってきた。
- ・学び合いをすることで教師も生徒もお互いによく「聴く」ということを意識するようになった。学校の雰囲気も以前より落ち着いてきた。
- ・全員が「解いてみたい」と思わせるような課題設定がポイントになる。その解決の過程で、他の生徒の色々な考え方に触れることで理解が深まる場面が増えた。深く考えることは活用力の向上につながる。またいつもはすぐに解決する生徒が、逆に他の生徒からヒントを得る場面も出てきた。
- ・授業後もしばらくの間、多くの生徒が席を立たずに考えを述べ合ったり、教師に質問したりする光景も見られるようになってきた。こうした学びに没頭できる課題・環境づくりが大切である。
- ・どのクラスも男女問わず自然と会話ができる雰囲気ができてきた。初めは教師と1対1を求めていた生徒も、学び合いを続けていくうちにグループでの話し合いに参加し、他の生徒と上手に関わるができるようになってきた。

### 4. 今後の課題

- ◇各教科の指導をキャリア教育と一層関連させて推進することが必要である。学習内容に有用感をもたせ、教科の学習が将来の目標や夢にもつながることを実感させることが、学習への意欲を高め、学力を向上させる大きな要因となる。こうした授業づくりについて、さらに研究・推進していくこと。
- ◇「学び合いのある授業」を一層推進するためにも、「言語活動の充実」についてすべての教科で実践と研究を積み重ね、指導技術を高めていくこと。
- ◇小・中学校の連携した取組について、特に次のことを重視していくこと。
  - ・義務教育の9年間を見通して、どのような児童・生徒を育てるかという全体構想や発達段階に応じた目標を設定するとともに、これまでの包括的な取り組みをさらに充実させること。
  - ・学力状況調査等の小中共同分析を継続させ、課題の共有及びその解決に向けて、PDCAサイクルによる具体的な実践を深めること。
  - ・学習習慣や学習規律など、9年間を見通した系統的な学びの基礎づくりを徹底すること。
  - ・教育実践をより効果のあるものとするために、小中が統一して取り組むことと合わせて、連携しながら各校独自に取り組むこと、新たに協力していくべきことなどを、学校教育目標と関連させながら具体化を図り実践すること。